

## 京都大学防災研究所 平成 29 年度一般研究集会「リモートセンシング技術の進展と活断層・内陸地震研究」に参加しました（2017/7/7-8）

テーマ：測地，活断層，研究集会，分野横断  
場所：京都大学宇治キャンパス

7月7日（金），8日（土）の二日間，京都大学宇治キャンパス，おうばくプラザにて京都大学防災研究所共同利用平成 29 年度一般研究集会「リモートセンシング技術の進展と活断層・内陸地震研究」が開催され，当研究所 災害理学研究部門から遠田晋次教授，福島洋准教授，今野明咲香助教が参加しました。本研究集会は，遠田晋次教授を研究代表として行われたもので，リモートセンシングに携わる測地学者，活断層研究者，地震研究者間に議論の機会を提供し，活断層と内陸地震発生機構への理解を深め，協力体制の構築を図ることを目的としています。

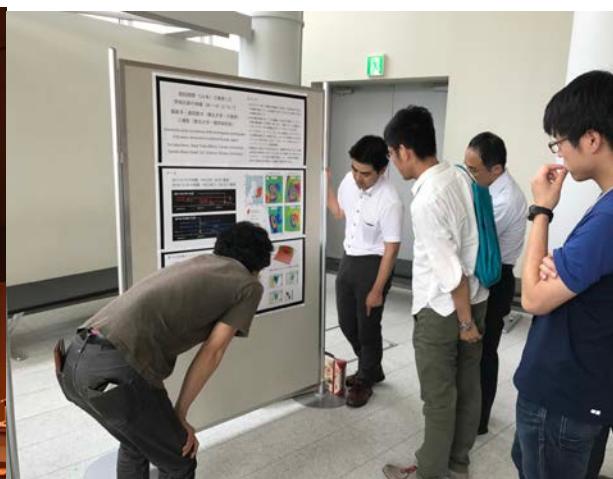
研究集会では，18件の口頭発表，5件のポスター発表が行われ，2016年熊本地震を対象とした研究を中心に，世界各国の最新の研究成果が発表されました（参加者80名）。特に衛星・航空地形計測技術の著しい発達によって，測地の研究者から副断層や遠地誘発変位を含めた地表地震断層の詳細な分布・変動量を広域的に可視化することが可能となり，地震後すぐに広域的な情報を取得可能であることが紹介されました。これは現地で地形や堆積物の調査などを行う活断層の研究者にとっても調査の効率化に役立っており，相互に協力することの重要性を認識しました。

総合討論では，すでに多くの研究者が分野間での協力の重要性について意識しているものの，学際的な研究を難しくしている理由の一つとして，各分野で使われている用語に明確な定義が無いことがあげられました。

以上のように本研究集会では，研究発表に加え，測地学者，活断層研究者，地震研究者間の認識の統一がなされました。今後は分野横断的な研究の進展により，さらなる成果が期待されます。



遠田教授による趣旨説明



福島准教授のポスター発表

文責：今野明咲香（災害理学研究部門）